日本古典評釈全注釈叢書

# 古代歌謡全注釈

日本書紀編

土橋寛

角川書店

日本古典評釈・全注釈叢書

古代歌謡全注釈
日本書紀編

昭和五十一年八月三十一日　初版発行

著作者　土橋寛
発行者　角川春樹
印刷者　中内佐光
製本者　鈴木俊一
発行所　株式会社　角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
振替東京　三一一九五二〇八
電話東京（265）七一一一（大代表）
郵便番号　一〇二

落丁・乱丁本はお取替え致します

Printed in Japan　暁印刷・鈴木製本

3392-761028-0946(0)

# 目次

凡例

一　素戔嗚尊の歌
1 八雲立つ出雲八重垣　（記1）　一五
二　下照媛の歌（夷曲）
2 天なるや弟棚機の　（記6）　一七
3 天離る夷つ女の　二〇
三　瓊瓊杵尊の歌
4 沖つ藻は辺には寄れども　二六
四　彦火火出見尊と豊玉姫
5 沖つ鳥鴨着く島に　（記8）　二九
6 赤玉の光はありと　（記7）　三〇
五　神武天皇大和平定の歌（来目歌）
7 宇陀の高城に　（記9）　三三
8 神風の伊勢の海の　（記13）　四〇
9 忍坂の大室屋に　（記10）　四三
10 今はよ今はよ　四九
11 蝦夷を一人百な人　五二
12 楯並めて伊那佐の山の　（記14）　五三
13 みつみつし来目の子らが　（記11）　五六
14 みつみつし来目の子らが　（記12）　六一
六　三輪神社の神宴歌
15 この御酒は我が御酒ならず　六四
16 味酒三輪の殿の　六九
17 味酒三輪の殿の　七〇
七　和珥坂の少女の歌
18 御間城入彦はや　（記22）　七七

八　箸の墓（時人の歌）
19 大坂に継ぎ登れる　八四
九　出雲振根と飯入根（時人の歌）
20 八雲立つ出雲建が　（記23）　九一
一〇　景行天皇の望郷歌（思邦歌）
21 はしきよし我家の方ゆ　（記32）　九九
22 大和は国の真秀らま　（記30）　九九
23 命の全けむ人は　（記31）　九九
一一　御木の行宮（時人の歌）
24 朝霜の御木のさ小橋　一〇四
一二　日本武尊の東征
25 新治筑波を過ぎて　（記25）　一〇八
26 日々並べて夜には九夜　（記26）　一〇九
27 尾張に直に向かへる　（記29）　一一一
一三　忍熊王の謀叛
28 彼方のあらら松原　一一三
29 いざ吾君五十狭茅宿禰　（記38）　一一八
30 淡海の海瀬田の渡りに　一二〇
31 淡海の海瀬田の渡りに　一二三
一四　神功皇后の勧酒歌と謝酒歌
32 この御酒は我が御酒ならず　（記39）　一二三
33 此の御酒を醸みけむ人は　（記40）　一二六
一五　応神天皇の国見歌
34 千葉の葛野を見れば　（記41）　一二三
一六　応神天皇と大鷦鷯尊
35 いざ吾君野に蒜摘みに　（記43）　一二三
36 水渟る依網の池に　（記44）　一二六
37 道の後古波儺嬢子を　（記45）　一二〇
38 道の後古波儺嬢子　（記46）　一二二
一七　国樔の奏歌
39 橿の生に横臼を作り　（記48）　一二三
一八　応神天皇と兄媛
40 淡路島いや二並び　一二六
一九　枯野の琴
41 枯野を塩に焼き（記74）　一五〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二〇　大山守皇子の謀叛

42 ちはや人宇治の渡りに　（記50）　一五三
43 ちはや人宇治の渡りに　（記51）　一五七

二一　桑田の玖賀媛

44 水底経臣の嬢子を　一六五
45 みかしほ播磨速待　一六六

二二　仁徳天皇と磐之媛皇后の問答歌

46 貴人の立つる言立　一七〇
47 衣こそ二重も良き　一七二
48 押し照る難波の埼の　一七三
49 夏蚕の蛾の衣　一七四
50 朝妻の避介の小坂を　一七七

二三　磐之媛皇后の嫉妬

51 難波人鈴船取らせ　一八〇
52 山背にい及け鳥山　（記59）　一八三
53 つぎねふ山背川を　（記57）　一八五
54 つぎねふ山背川を　（記58）　一八六
55 山背の筒城の宮に　（記62）　一八九
56 つのさはふ磐之媛が　一九〇
57 つぎねふ山背女の　（記63）　一九四
58 つぎねふ山背女の　（記61）　一九八

二四　鷦鷯皇女と隼別皇子

59 ひさかたの天綺服（織服女の歌）（記66・67）　二〇〇
60 隼は天に上り（舎人の歌）（記68）　二〇三
61 梯立の嶮しき山も　（記70）　二〇四

二五　雁の卵

62 たまきはる内の朝臣　（記71）　二〇六
63 やすみしし我が大君は　（記72）　二〇七

二六　履中天皇の難波宮脱出

64 大坂に遇ふや少女を　（記77）　二〇八

二七　允恭天皇と衣通郎姫

65 我が夫子が来べき宵なり　二一〇
66 細紋形錦の紐を　二一三
67 花妙し桜の愛で　二一五
68 常しへに君も逢へやも　二一七

二八　軽太子の悲恋

69 あしひきの山田を作り　（記78）　二二〇
70 大君を島に放り　（記80）　二二一

71 天飛む軽嬢子 （記83） 二二三
72 大前小前宿禰が （記81） 二二四
73 宮人の足結の小鈴 （記87） 二二五

二九 円大臣の妻の歌
74 臣の子は梼の袴を 二二六

三〇 蜻蛉の功績
75 大和の小武羅の岳に （記97） 二二九

三一 葛城山の猟
76 やすみしし我が大君の （記98） 二三三

三二 泊瀬の山讃め歌
77 隠国の泊瀬の山は 二三六

三三 闘鶏御田の処刑（秦酒公の歌）
78 神風の伊勢の 二四一

三四 歯田根命の償い
79 山辺の小嶋子ゆゑに 二四六

三五 猪名部真根の処刑（同伴巧者の歌）
80 あたらしき猪名部の工匠 二四九

81 ぬばたまの甲斐の黒駒 二五一

三六 吉備臣尾代の奮戦
82 道に闘ふや尾代の子 二五三

三七 顕宗天皇の室寿
83 稲筵川副柳 二五九

三八 忍海の角刺宮（当世詞人の歌）
84 大和辺に見が欲しものは 二七三

三九 顕宗天皇と淡海の置目
85 浅茅原小殖を過ぎ （記111） 二七四
86 置目もよ淡海の置目 （記112） 二七六

四〇 武烈天皇と鮪臣の歌掛き
87 潮瀬の波折りを見れば （記108） 二七八
88 臣の子の八重や韓垣 二八〇
89 大太刀を垂れ佩き立ちて 二八一
90 大君の八重の組垣 二八三
91 臣の子の八節の柴垣 二八四
92 琴頭に来居る影媛 二八五
93 大君の御帯の倭文服

四一　影媛の悲歌
94 石の上布留を過ぎて　二六七
95 青土よし奈良の峡谷に　二九二
四二　安閑天皇と春日皇女
96 八島国妻枕きかねて　二九五
97 隠国の泊瀬の川ゆ　二九九
四三　毛野臣の葬送
98 枚方ゆ笛吹き上る　三〇四
四四　加羅国と目頬子（郷家等の歌）
99 加羅国を如何に言ことそ　三〇七
四五　大葉子の最期
100 加羅国の城の上に立ちて　三〇九
101 加羅国の城の上に立たし（或人の歌）　三一〇
四六　蘇我馬子の寿歌
102 やすみしし我が大君の　三一三
103 ま蘇我よ蘇我の子らは　三一八
四七　聖徳太子の歌
104 しなてる片岡山に　三二一
四八　境部臣毛津の自殺（時人の歌）
105 畝傍山木立薄けど　三二七
四九　蘇我大臣蝦夷の歌
106 大和の忍の広瀬を　三二九
五〇　山背大兄王の滅亡
107 岩の上に小猿米焼く（童謡）　三三一
108 向つ峰に立てる夫らが（猿の歌）　三三五
五一　蘇我氏の滅亡（謡歌）
109 はろばろに言そ聞こゆる　三四〇
110 遠方の浅野の雉　三四〇
111 小林に我を引入て　三四〇
五二　常世の神（時人の歌）
112 太秦は神とも神と　三四四
五三　野中川原史満の挽歌
113 山川に鴛鴦二つ居て　三四九
114 本毎に花は咲けども　三四九

五四　孝徳天皇の歌
115 金木着け吾が飼ふ駒は　三五三
五五　斉明天皇の挽歌
116 今城なる小山が上に　三五五
117 射ゆ獣を認ぐ川辺の　三五五
118 飛鳥川漲ひつつ行く水の　三五五
119 山越えて海渡るとも　三六〇
120 水門の潮の下り　三六〇
121 愛しき吾が若き子を　三六〇
五六　白村江の敗戦（童謡）
122 平偃僂の作れる　三六四
五七　中大兄皇子の挽歌
123 君が目の恋しきからに　三六九
五八　法隆寺の火災（童謡）
124 打橘の頭の遊びに　三七一
五九　百済人らの授爵（童謡）
125 橘は己が枝々　三七三
六〇　天智天皇の崩御（童謡）
126 み吉野の吉野の鮎　三七九
127 臣の子の八重の紐解く　三七九
128 赤駒のい行き憚る　三七九
解説　三八五
系図　三九三
歌謡語彙総索引　三九五
主要語釈・事項索引　四三一
あとがき　四三九
古代歌謡地図　折込み

# 図版目次


大和三山(航空写真)　口絵
74 アイヌの坐機　一八
75 群れ飛ぶチドリ　二六
76 仕掛弓によるワナ　三四
77 バネによるワナ　三五
78 タチソバとイチサカキ　三七
79 厳瓮(埴輪)　四一
80 埴輪の兵士像　五一
81 大神神社(三輪神社)　五五
82 箸墓　六六
83 野見宿禰の墓址(五輪塔)　九〇
84 出雲人形　九〇
85 杵築大社(出雲大社)　九七
86 平群の山(八田山丘陵南部)　一〇一
87 杵島の山　一〇五
88 鏑矢　一一五
89 セレベスの鼓　一一〇
90 鼓をもつ人物埴輪　一一〇
91 ジュンサイ　一一九
92 川俣神社　一二〇
93 船の埴輪　一二七
94 琴を弾く人物埴輪　一五一
95 宇治稚郎子の墓　一六一
96 播磨灘　一六六
97 朝妻の坂道　一七八
98 大和神社　一八八
99 綺(正倉院御物)　二〇一
100 大津道・丹比道付近地図　二〇九
101 錦(正倉院御物)　二一四
102 ホンダワラ　二一九
103 呉床　二二一
104 狩りの図　二二五
105 采女　二二五
106 恵我の市付近(河内国府址)　二二八
107 犢鼻褌　二三〇
108 靫　二三五
109 八鹿踊り(愛媛県宇和島市)　二三三
110 鐸　二三五
111 海柘榴市付近　二三七
112 高橋川上流付近　二六八
113 宅春日神社　二六八
114 奈良の峡谷(磐之媛陵付近)　二七三
115 対馬海峡　二〇八
116 島の宮跡　二一四
117 片岡坐神社　二二二
118 ニホンカモシカ　二二二
119 斉明天皇陵　二二七
120 飛鳥川　二二八
121 麻績神社　二三四
122 ミズアオイ　二六一

# 凡　例

一　本書は『古代歌謡全注釈』のうち、『日本書紀』所載の歌百二十八首について歌謡的解釈を加えたもので、さきに刊行した『古代歌謡全注釈古事記編』（以下『古事記編』と略称する）の姉妹編である。したがって注釈および解釈についての立場・方法・形式は、『古事記編』と同じである。また記紀に重出する歌も五十二首あるので、『古事記編』に書いたことは省略するのも一つの方法であるが、本書は一応独立した書物であるという立場から、次のような方針をとることにした。

(1)古代歌謡全般についての「解説」は、『古事記編』にゆずり、本書では『日本書紀』だけに見える「時人の歌」「童謡」「謡歌」について述べることにした。

(2)記紀重出歌については、基本的な必要事項は、『古事記編』と重複してもこれを書くこととするが、それ以外はできるだけ重複しないようにした。

二　本文は『日本書紀』所載の歌詞を、それに関係のある前文・後文とともに掲げることとし、便宜上『日本書紀』の物語に基づいて六十の群に分け、各群に適当な題をつけた。

三　歌詞には検出の便宜のために、日本古典文学大系『古代歌謡集』と同じ番号をつけた。番号のつけ方は武田祐吉氏の『記紀歌謡集』（岩波文庫）、『記紀歌謡集全講』と同じで、全部で百二十八首となる。なお、記紀重出歌は、歌番号をイタリックで記し、歌詞のあとに括弧して『記』の歌番号を示しておいた。

四　歌詞は、意味がわかるように漢字仮名交り文で表記し、漢字にはすべてルビを施して原文の訓みを表わした。また詞形・構造がわかるように、行を配列し、句読点をつけた。

五　『顕宗前紀』に見える天皇の室寿の寿詞および名告りは、歌謡ではないが、参考のために掲げることとし、歌番号の代わりに(イ)(ロ)(ハ)の記号をつけた。表記の形式は、歌謡に準じ、原文の訓注は、ルビによって表わした。

六　底本には日本古典文学大系『日本書紀』上下を用いた。ただし、字体及び訓み方は、必ずしも底本によらな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

い所がある。

七　原文校異は、歌謡の原文だけに限定し、かつ校異は、底本の独立異文、底本を改めた文字、その他の重要な箇所だけについて記した。ただし、歌謡以外の原文についてとくに校異を必要とする場合は、語釈で記すことにした。原文校異及び語釈で用いた略号は、次のとおりである。

兼方本――大橋寛治氏所蔵卜部兼方本二巻（昭和四十六年刊影印本）
兼右本――天理図書館所蔵卜部兼右本二十八巻
北野本――北野神社所蔵本（昭和十六年刊影印本）
岩崎本――岩崎家所蔵本（秘籍大観所収）
前田本――前田家所蔵本（秘籍大観所収）
宮内庁本――宮内庁書陵部所蔵本（秘籍大観所収）
寛文本――寛文九年整版本
『私記』――彰考館蔵『日本書紀私記』（新訂増補国史大系所収）
『釈紀』――前田本『釈日本紀』（同右）

八　口訳は、単なる逐語訳ではなく、歌全体の論理の解明としての「解釈」を示す場所である。韻文と散文、古語と現代語との表現の方法の相違のために、意訳をしたり、括弧の中に必要な句を補ったりして解釈の正確さを期したが、結局のところ、歌が表現する意味は歌そのものによって理解するほかはなく、口訳はそのための手段にすぎない。語釈と照らし合わせて、意のあるところを汲み取っていただければ幸いである。

九　語釈は、問題のない語については、注釈・文法についての一通りの説明と、必要によっては用例を挙げることにしたが、注釈上および解釈上問題のある語については、かなり詳しく述べた。特に独立歌謡が物語や社会的事件に結びつけられている場合は、歌全体も、一つ一つの語彙も、独立歌謡としての意味と、物語歌または童謡としての意味と、二つの意味をもっているから、「古代歌謡」の解釈としては、その両方に目を向けなければならない。そのような解釈上の問題については語釈の欄だけで処理できる場合もあるが、考説における歌の実体の推定と関わり合う場合が多いから、両方を見合わせていただきたいと思う。なお現在の地名とその所

属は『日本分県地図地名総覧』（人文社、一九六八年版）によった。

一〇　構成は、歌の構造に関する説明で、必要によっては詞形に論及する場合もあるが、それらは『古事記編』でかなり詳しく書いたので、本書では特に必要を認めた場合のほかは省くことにした。

一一　考説は、所伝と歌詞との関係、歌の実体とその意味、歌や物語の述作者、その他重要な問題を、歌の解釈との関連において述べた。注釈書での考説であるから、あまり詳しく論述することはできないが、問題点だけは指摘してあるので、それらの問題点がさらに深められ、発展させられることを期待したい。

一二　頻繁に引用される書名は、次の略号を用いた。

『記』――『古事記』
『紀』『書紀』――『日本書紀』
『続紀』――『続日本紀』
『旧事紀』――『先代旧事本紀』
『姓氏録』――『新撰姓氏録』
『神名帳』――『延喜式』巻九神祇・巻十神祇
『和名抄』――狩谷掖斎著『箋注倭名類聚抄』本文（十巻本）。但し地名は元和古活字那波道円本（二十巻本）。
『名義抄』――『類聚名義抄』（観智院本）
『時代別国語辞典』――沢瀉久孝編『時代別国語大辞典上代編』
『地名辞書』――吉田東伍著『大日本地名辞書』
『植物図鑑』――牧野富太郎著『牧野新日本植物図鑑』
『厚顔』――釈契沖著『厚顔抄』
『略註』――賀茂真淵著『日本紀和歌略註』
『通証』――谷川士清著『日本書紀通証』
『集解』――河村秀根・益根著『書紀集解』
『記伝』――本居宣長著『古事記伝』

『落葉』――荒木田久老著『日本紀歌解槻乃落葉』
『言別』――橘守部著『稜威言別』
『通釈』――飯田武郷著『日本書紀通釈』
『新解』――相磯貞三著『記紀歌謡新解』
『全註解』――相磯貞三著『記紀歌謡全註解』
『全講』――武田祐吉著『記紀歌謡集全講』
大系『古代歌謡集』――日本古典文学大系『古代歌謡集』
大系『書紀』――日本古典文学大系『日本書紀』
『評釈』――山路平四郎著『記紀歌謡評釈』

# 古代歌謡全注釈

日本書紀編

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com